

日本人の楽しみ「お盆」は時空を超えた親族が集まる日々

1 お盆休みとウラバンナという祖先霊崇拝の起源

日本人の八月といえば「お盆休み」です。最近では単なる夏休みとしてお盆の送り火や迎え火を行っている家庭をあまり見かけなくなりました。特に都会では、マンションなどの高層住宅が多く、下手に火を起こすと火災報知機が鳴ってしまい近所迷惑になってしまふ、そんな心配もあってなかなかお盆の迎え火や送り火を見ることがなくなってしまいました。家庭や建物の事情が変わると習慣も変わるものですね。

さて、日本の場合、ヨーロッパのように長期間のサマーバケーションがあるわけでもないし、また日本人は世界的に勤勉な国民として有名であります、その日本人もこのお盆と正月に関しては、休んでよいとされていたのです。いつも仕事をしていた日本人は、うれしいこと、思いがけずの良いことがあった時に「盆と正月と一緒に来たい」というような表現でそのうれしさを表現することがありました。実際に、お盆の休みと正月休みは、現在のようにゴールデンウィークなどの無い江戸時代や戦前の人々にとっては、一年の中で少ない長期休みの期間ではなかったのではないのでしょうか。それほど「お盆」というのは「休み」という意味でも、また「家族に会える日」としても多くの人にとって待ち遠しい日であったのです。

では、そのお盆と夏休みに関して今回は少し考えてみましょう。

そもそも「お盆」とは、なんでしょうか。お盆は、太陰太陽暦である和暦の七月十五日を中心に日本で行なわれる、祖先の霊を祀る一連の行事のことを言います。もともとは、仏教用語の「盂蘭盆」の省略形として「盆」（一般に「お盆」）と呼ばれています。ここで「盆」とは文字どおり、本来は霊に対する供物を置く容器を意味するため、供物を供え祀られる精霊の呼称となり、「盂蘭盆」と混同されて通称「お盆」といわれるようになったということのようです。

では、そのもととなった「盂蘭盆」とはどのようなものなのでしょうか。盂蘭盆は、サンスクリット語の「ウランバナ」を中国で感じに表記したものです。この漢字自体にはあまり意味はなく、基本的には、音をそのまま漢字に置き換えた形になっているのではないのでしょうか。サンスクリット語の「ウランバナ」は、現在の「ウド、ランプ」(ud-lamb) 要するに倒懸（さかさにかかる）という意味であるとか、または古代ペルシャ語の「ウルヴァ

ン」(urvan)、要するに「靈魂」という意味が合わさってできた言葉が語源ではないかといわれています。

古代ペルシャでは、現在の日本に近い多神教の考え方がありました。要するにすべての森羅万象に精霊または神が宿っていると考えられていたのです。その精霊は、当然に人間の中にも宿っていて、人間は死ぬと魂の最も神聖な部分、これを古代ペルシャ語、そしてゾロアスター教の中において「フラワシ」という下級霊になっているのですが、そのフラワシになった祖先霊を迎え入れる儀式があり、そのことを「ウラバンナ」といっていたようです。

その儀式が、仏教にはいり、そしてインドから中国にわたりそして日本にわたってきたのです。日本にわたってくるときには、「盂蘭盆」という文字で伝わってきています。もともとの「ウラバンナ」という儀式とは関係なく、「盂蘭盆」という漢字の示すイメージと、中国で編纂翻訳された「偽経」である『盂蘭盆経』や、『父母恩重経』や『善悪因果経』などに記載された内容から判断されていたと考えられるのです。

2 中国における「盂蘭盆会」

では、「ウラバンナ」ではなく「盂蘭盆」とはどのようなものでしょうか。これは、中国の祖先崇拜の方法を見て、日本の「お盆」と比較してみるとよくわかるのかもしれませんが。

そこでまず、そのもととなる『盂蘭盆経』に何が書かれているか見てみましょう。

安居（インドでは夏の期間に雨季があり、その雨季はあまり外に出ない。その雨季の期間をいう）の最中、神通第一の目連尊者が亡くなった母親の姿を探すと、餓鬼道に堕ちているのを見つけた。喉を枯らし飢えていたので、水や食べ物を差し出したが、ことごとく口に入る直前に炎となって、母親の口には入らなかった。哀れに思って、釈尊に実情を話して方法を問うと、「安居の最後の日（旧暦の7月15日）にすべての比丘に食べ物を施せば、母親にもその施しの一端が口に入るだろう」と答えた。その通りに実行して、比丘のすべてに布施を行い、比丘たちは飲んだり食べたり踊ったり大喜びをした。すると、その喜びが餓鬼道に堕ちている者たちにも伝わり、母親の口にも入った。

<以上抜粋>

『盂蘭盆経』などの「偽経」とは、中国や日本などにおいて、漢訳された仏教経典を分類し研究する際に、インドまたは中央アジアの原典から翻訳されたのではなく、中国人が漢語で撰述したり、あるいは長大な漢訳経典から抄出して創った経典に対して用いられた呼び名です。「偽経」だからといって問題があるのではなく、もともとの本の解説本のようなものとして役立てられていました。

要するに「盂蘭盆」は、「偽経」がもとになっているということは、もともとの仏教の教えとともに、仏教が伝わった中国の伝統そのものの中に祖先崇拜があり、そこに仏教的な要素が加わった儀式ということが言えるのではないのでしょうか。

それで中国の「盂蘭盆」は、本来的には安居の終わった日に人々が衆僧に飲食などの供養をした行事が転じて、祖先の霊を供養し、さらに餓鬼に施す行法となっていき、それに、儒教の孝の倫理の影響を受けて成立した、目連尊者の亡母の救いのための衆僧供養という伝説が付加されたと考えられているのです。

中国では、梁の武帝の大同4年（西暦538年）に帝自ら同泰寺で盂蘭盆齋を設けたことが、『仏祖統紀』に書かれています。特に「盂蘭盆齋」に特別な注釈や解説がついていないことから考えると、すでに、この時代には「盂蘭盆」という言葉の意味やその儀式は、ある程度認識されていたと考えるべきではないでしょうか。またこの梁の武帝の時代の文筆家である宗懐が撰した『荆楚歳時記』には、7月15日の条に、僧侶および俗人たちが「盆」を営んで法要を行なうことを記し、『盂蘭盆経』の経文を引用していることから、すでにこの時代には「盂蘭盆」や「盂蘭盆経」が中国には存在していたことがわかります。

では中国ではどのようなことを行ったのでしょうか。

もともとの仏教の儀式は、僧侶が他の僧の前に於いて自ら犯した罪を指摘されて、懺悔するという「自恣」という儀式でした。さらには、亡き親への追善を願って、僧侶達に盆器に持った食事を差し上げて供養する儀式とされていました。

中国では、「盂蘭盆経」に書かれている、「尊勝経」・「目連経」が読まれ、餓鬼を供養する願いを発し、諸々の効果のある陀羅尼という呪文を唱えるのです。

そこでは、まず経文で餓鬼を呼び寄せます。餓鬼はノドが小さくて食べ物が入らないために、そのノドを大きく開き、その開いたノドに仏の功德でもって智慧の味が付いた食べ物を与えて供養するのです。その供物は、甘露の法味をもって一切の苦を除きます。そして菩薩が受持すべき戒律を授け、修行するべき楼閣へ安住させて、全ての諸仏へ結縁して悟りの世界に入るようにながすのです。このことによって、餓鬼が供養され、目連のように、亡くなった母を助ける、母だけでなく先祖を助けることができることとされているのです。

中国では、近年までこのような風習が残されていました。最近では、あまりこのような儀式をする人は少ないようですが、しかし、今でも先祖を大切にする文化は残っており、正月（春節）などに合わせて先祖参りを行うなどのことが行われています。

3 八百万の神と先祖崇拝とお盆

日本では、いつごろからお盆の習慣があるのであろうか。

祖先崇拝の考え方に関しては日本は古来から存在するのです。ある意味でいえば、世界各国の「八百万の神」要するにすべてのものに神が宿ると考えられている土地すべてにおいて、祖先信仰は当然に行われていたと考えるべきではないでしょうか。何しろすべてのものに神が宿っているのです。先祖も形を変えて様々な形で見守っていると考えられています。その先祖に見守られているという考え方は、そのまま先祖崇拝と、将来の子孫たち

への時間的な系譜として重視する形になります。古代ペルシャのゾロアスター教に言う「フラワシ」と同じような信仰が、古代の日本にもあったと考えることは、そんなに難しいことではありません。

特に、日本の場合は古墳という墳墓を作る制度がありました。これは推古天皇の時代まで続いていた風習です。この古墳は、何も大きな墓を作ることが目的ではありません。古墳はあくまでも、亡くなった天皇や有力豪族の「住居」であり、精霊が肉体に戻った時に、不自由しないように生前の愛用品など様々なものが副葬品として埋葬されました。それだけではありません。この古墳は、先代がなくなったのちに、その支配権の引き継ぎを行う儀式の場になっていたのです。ちょうど円墳の部分の上で、墓の中から上がってくる精霊を、新しい王や支配者が引き継ぐ儀式を行っていたのです。

西洋では「王権神授説」というものがありました。しかし、日本など多くの神がいる文化の中では、一人の神が人間に対して王権を授けるという感覚はありません。逆にすべての人間に神が宿っており、そしてその神々に様々な役割があると信じられていたのです。その神々の間に優劣はなく、支配者の例は支配者としての役割を行うという形になったのです。古墳も調べればその上部が円形に埴輪が埋められているなど、儀式の場所になっており儀式が行われた跡なども見られます。

このように古墳の成り立ちなどから、日本の先祖崇拜の文化があったことがわかります。しかし、日本は古代の文献がないので、そのような内容はあまり見受けられません。そこで文献が残っている日本霊異記以降の書物でこれらの内容を見て行くと、やはり日本霊異記に祖先崇拜と輪廻に関する仏法的な内容を書かれています。

しかし、「盆」についてよく書かれているのはやはり今昔物語です。今昔物語は、主に地蔵盆に関して書かれているのですが、今昔物語前編で13の説話が入っています。

「今昔物語」巻十七に説かれる僧仁康の逸話では、地蔵盆（地蔵講）についてこのように書かれています。

『今は昔、京に祇陀林寺という寺があり、そこに仁康という僧が住んでいた。時に、治安三年（1023）の四月頃、疫病がはやり、道には死屍が累々と横たわっていた。これを愁えた仁康の夢枕に一人の小僧が立ち、告げていうには「もし汝が地蔵菩薩の像を造ってその功德をたたえるならば、現世に迷う人々を救い、あの世では地獄で苦しむ人々を救うことができるであろう」

夢から醒めた仁康は、早速、大仏師康成に頼んで半金色の地蔵菩薩像を作って開眼供養し、その後は多数の道俗男女を集めて地蔵菩薩を供養する地蔵講を催した。そうすると、仁康や信者たちは、ついに疫病に冒されなかった。』

地蔵講、あるいは地蔵祭りは、民間の地蔵信仰であり、中国から伝来した信仰の中の一つです。毎月決められた日に地蔵尊を飾りたて、提燈を吊り下げ、青果や菓子など供えものを行っている。このうちで盂蘭盆会の月に行われるものを「地蔵盆」といい、夜には子供会による花火大会があり、大人達は数珠くりを行なう風習になっています。

奈良時代には上層階級の人々の写経など限られた人々に知られていましたが、今昔物たちが書かれた平安時代以降は、貴族から僧侶、下人、従者にまで幅広く、地蔵菩薩の利益が及んでいるのです。

このように、日本のお盆は、もともと日本に存在していたアニミズム信仰における祖先崇拜と、そこに中国から伝わった「盂蘭盆会」の考え方が合わさって、現在のお盆になっているのです。

4 なぜ「おぼん」といわれるようになったのか

それでは、もう少し日本の文献からお盆に関してみてみましょう。

お盆は昔「ぼに」と呼ばれていました。これは、人間が死ぬと「鬼」になると思われていたのですが、その「鬼」の語源が「隠爾（おぬに）」であり、「隠れる」という意味につかわれているのです。逆に先祖を慕うという意味で「慕」または、盂蘭盆経の逸話から「母」という言葉からとも言われています。「ぼに」という言葉の「ぼ」という発音にはそのような意味が隠されています。

「慕う」または「母」ということから見てくると、藤原道綱の母が嫉妬をする感情を書いた『蜻蛉日記』に「ぼに」という単語が使われています。

『十五六日になりぬれば、盆（ぼに）などするほどになりけり。見れば、あやしきさまに荷なひ戴き、さまざまにいそぎつつ集まるを、もろともに見て、あはれがりも笑ひもす。さて、心ちも異なることなく、忌も過ぎぬれば、京に出でぬ。

秋冬、はかなう過ぎぬ。』

（「般若寺で過ごすのが十五、六日になったので、盆などする時節になってしまった。見ると、びっくりするほどお供えを担いだり頭に載せたり、それぞれに準備のために集まっているのを、夫と一緒に見て、気の毒がったりおもしろがったりもする。そうして、具合に変化もないまま、忌も明けたことだし、京に出た。

秋冬と、何事もなく過ぎた。）」

ここで書かれているように、すでに平安時代には、お盆にはびっくりするほどのお供えをし、先祖をまつる風習があったのです。このほかにも『うつぼ物語』などにも細かくそれらの内容が書かれています。

5 日本のお盆の風習

では、その時から伝わっている各地の内容はどのようになっているのでしょうか。その代表的なものを見てみましょう。

まずは七夕です。七月七日は七夕です。そもそも七夕は棚幡とも書き、故人をお迎えするための精霊棚とその棚に安置する幡（ばん）を拵える日とされています。その行為を 7

日の夕方より勤めたために棚幡がいつしか七夕という字を書くようになったといわれています。なお、お盆期間中、僧侶に読経してもらい報恩することを棚経参りといいますが、これは精霊棚で読むお経が転じて棚経というようになったともいわれています。織姫と彦星の話は非常にロマンティックではありますが、しかし、それ以外の笹の葉に願い事を書くのも、天や先祖に見てもらって、それらのことを頑張るという仕組みであると考えれば、一つの宗教的な儀式にも見えるのではないのでしょうか。

意外なところから入りましたが、次はメジャーなところで「迎え火」です。これは、13日夕刻の野火を迎え火と呼び、その迎え火を焚いた後、精霊棚の故人へ色々なお供え物をする習わしになっています。これは、各家が火をおこし、自分の先祖の霊が迷わないように明かりをともし迎え入れるということになります。その迎え入れたのちには、家の中の精霊棚、今では仏壇などに先祖が戻ってきて、お盆の期間中家で家族と一緒に過ごすと言われています。地方によっては、御招霊など大がかりな迎え火も行われることもあります。

迎え火があれば「送り火」があります。お盆を迎えた翌日の16日に「送り火」を焚いて、来年も来ていただけますように、そして天下から見守ってくださるよにという願いを込めて迎え火と同様に火を焚いて送り出すものです。京都の五山送り火、いわゆる大文字焼は有名ですね。また、川へ送る風習もあります。いわゆる「灯籠流し」が川で行われる送り火です。このように山や川で火をたくのは、山や川に精霊が多くいると信じられており、精霊の行き来する道に火をともしてまた来られるような道を示すという意味があるといわれています。

もう一つ。お盆の行事で忘れてはいけないのが「盆踊り」です。15日の盆の翌日、16日の晩に、寺社の境内に老若男女が集まって踊るのを盆踊りといえます。これは地獄での受苦を免れた亡者たちが、喜んで踊る状態を模したといわれています。精霊が返ったのちに、精霊が普通に帰り地獄の責め苦がなくなったことの喜びを、送り火とともに示すという意味があるようです。またお盆が陰暦で15日、要するに十五夜であるということからも、またその翌日が十六夜であることから、月が明るく、一晩中踊っていられるということもあります。

このほかにも、地方によっては「精霊船」や「精霊馬」を作ってお盆の期間中には、故人の霊魂がこの世とあの世を行き来するための乗り物を作るところもあります。「精霊船」は、まこもで作った船で、お盆の期間中精霊棚に置き、お盆の期間が終わったら灯籠流しのようにお盆中に供えた供物を載せ川に流すような風習があります。また、「精霊馬」では、きゅうりやナスにマッチ棒や折った割り箸などをさして足に見立て、馬を作るのです。ちなみにきゅうりは足の速い馬に見立てられ、あの世から早く家に戻ってくるように、また、ナスは歩みの遅い牛に見立てられ、この世からあの世に帰るのが少しでも遅くなるように、また、供物を牛に乗せてあの世へ持ち帰ってもらうとの願いを込めて作るといわれています。

また「施餓鬼」と呼ばれ、餓鬼道に陥った亡者を救ったり、餓鬼棚と呼ばれる棚を作り、

道ばたに倒れた人の霊を慰めるなどの風習もあります。また、沖縄県では、独特の風習や行事が伝えられ、代表的なものに、沖縄本島のエイサーや八重山諸島のアンガマがあります。

6 先祖崇拝と日本人の心

このように、日本の「お盆」には、夏休みという意味合いよりも、「先祖と一緒に時間を過ごす」という感覚があります。また、古代ペルシャの「フラワシ」ではありませんが、死んで霊になった人は、そのもっとも神聖な部分だけが天上界または黄泉の国に行けると信じられています。ここに仏教的な「輪廻転生」の考え方が加わります。この考え方から、最も神聖な部分だけを持って生まれてきた赤ちゃんは、常に神の加護があり、そして神聖な存在とされるのです。今でも赤ちゃんのことを「天真爛漫」と表現することがあると思いますが、このような日本人の考え方があらわされていると考えてよいのではないのでしょうか。

同じように、日本人の中には、「亡くなった方に罪はない」という感覚があります。死んでしまったのちまで犯罪者だとか悪い人だとか言わないという風習です。西洋などではよく、亡くなったのちに犯罪などが発覚して、その墓を暴いてしまうというようなことがあります。日本人の場合は、何しろ神聖な部分だけが残っているのですから、そのような罪を亡くなってからも暴き立てる必要がないということになっています。

人は、ある人にとって良くないこと、または罪なことも、別な角度から見れば、良いことまたは役に立つこともあります。時代やその時の加減、または解釈などによって、その人の評価は様々に分離されるものです。日本人のように、生きているときから先祖、そしてその先祖を大事にすることから子孫を大事にするという考え方まで、時間を超えて物事を考える民族にとっては、その時、その瞬間の解釈で物事を決めてはいけないという考え方があります。時の英雄が、時間をおいて反逆者と考えられることも少なくないのです。そのことを最もよくわかっているのが日本人なのではないのでしょうか。

また社会的に避難される人物でも、家族には優しくったり、あるいはその逆などということも多数あります。

毎年この時期になって、常に問題になる戦争や、またはそれにまつわる様々なことも、このお盆や日本人の文化、そして日本人の死生観などから考えてみると、案外とわかりやすいのかもしれませんが。何しろ、戦争で亡くなられた御霊も、現代人の先祖であることは間違いがなく、やはりこのお盆の時期には帰ってくるのです。その精霊たちをどのようにして迎えるのか、そして、その先祖たちに、現代の人々は恥ずかしくない生き方をしているのか。

ある意味で、お盆は家族と会い、先祖と会い、そして楽しい時間を過ごしながら、先祖の生き方や自分の家族の生き方、そして子孫の運命までを静かに考え、見つめなおす時間

なのかもしれません。楽しいだけの夏休みではなく、猛暑の中、少し落ち着いて物事を考えてみてもよいのかもしれません。